

逆行スパシアンチヘイト

20世紀青年

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくある逆行スパシンアンチヘイトを書きたくなったので書き殴った小説。

昔読んでたものが読めなくなっていくのが悲しすぎる。

アンチヘイトは書きなれてないので薄味です。

一応アスカ、初号機逆行ものでLAS予定です。

完結させたいけど見切り発車が過ぎるのでシンエヴァ公開したら凍結します。

目次

プロローグ	1
第壹話	4

プロローグ

世の中、愛と希望と友情があれば何とかなると知ったのはいつ頃だっただろうか。こんなクサイことを考えるようになったのはせいぜい10年ぐらいの間だろう。今やこの世には僕とアスカと時々綾波しか居なく、他の生命体は徒歩で確認できる圏内には居なかった。：他の人間はL・C・Lに、動植物はサードインパクトの余波で死に絶えてしまった。むしろ消し飛んだと言った方が正しいんだけど。

初号機と同化(笑)した母親だった魂は寂しさから地球に戻ってきた。つまりはご高尚な考えも人間の本能的な部分から切り離すことが出来ず、中途半端な形で望みを叶えたのだろう。人間のエゴに付き合わされた初号機ちゃんも可哀想なことこの上ない。幸いなことに地球に戻ると同時に初号機の魂は解放され、今はアスカとお散歩中なので気分転換は出来ているんじゃないかと思う。：痛覚まで同調した意味は有ったのだろうか？

その夜、アスカと夫婦らしく過ごした。めつつつちやイチャイチャした。何年経っても可愛らしいアスカはまさに理想のお嫁さんだろう。：昔の攻撃的な部分は20年前には意地を張り続けることに疲れたせいで無くなった。昔は嫌だったけど今はなんだか懐かしいのは、潜在的にMだったのだろうかと自分のことが心配になってしまう。

アスカをオカズにしたのは今では笑い話となった。何かあると引き合いに出されるのはもう勘弁してもらいたいけど。

朝。ここ数十年変わらないアスカが隣に居て、外を見ると初号機が座っているそんな朝だった。違うのは久しぶりに綾波が出てきたことだけ、の筈だった。

「おはよー綾波。朝ごはん一緒に食べる？」

「おはよう、碇くん。ご飯より大切な話があるわ」

「ダメよレイ！ご飯は何よりも大切なんだから、ほらちやつちやと食べるー！」

時たま現れる綾波のせいかお陰か、アスカの世話焼きスキルはか
りのものになっていた。これはいいお母さんになりそうだあ……。
綾波が言ってた話も何も無い世界で何かが起こるはずもないし食
べからで十分だと思っていました。

「それで、話ってなに？」

食後、ふと思いついたため、綾波にそう聞いてみた。

「あと2時間でこの世界は滅びるわ」

「……アスカ、俺は君が居てくれればそこが例え地獄でも幸せだよ」

「シンジ！愛してる！」

「……………」

いつもなら何かしらの綾波による批評が入る所で無言の綾波を見
て、いよいよ僕たちはそれが現実だと認識した。

大まかに言うとう母なるリリスがサードインパクトで失った体力が
戻らず消滅。その子孫であるリリンも消えてしまうのだそうだ。

「だからあなた達をあの際に戻すわ」

「えっ、何それは……（ドン引き）」

「いいだろお前、成人の日だぞ（2049. 1. 11）」

綾波に汚つたない知識をL・C・Lを通じて埋め込んだ奴は死ん
で、どうぞ（無慈悲）

一応？過去に戻るまでには時間があるらしいのでアスカと初号機
とビーチバレーに興じた。相変わらず、初号機のブロックを抜くのは
出来ないと思われたけど、アスカの動物の勘により、過去十数年ぼく
らを完封していた初号機からポイントを取る事に成功し、満足したま
まあの地獄のような2015年に飛ばされた。

「うっわ、ここかあ……絶滅危惧種の公衆電話だけど、サードインパク
トで物理的に絶滅しちゃうんだよね（サードインパクトギャグ）」

僕が手に持つ公衆電話の受話器からは女性のアナウンスが流れ続
けている。

「10歳ぐらいにしてくれればL・C・Lで取り込んだ知識で俺TU

EEEE出来たのに……」

途方に暮れる僕の目の前に国連軍の攻撃ヘリとサキエルが現れた。

……他に地響きがするのはどうしてだろう？（すつとぼけ）

「ウオオオオオン!!!」

横合いから現れた紫色の巨人。初号機による攻撃！サキエルの腕は消し飛んだ！続く第二撃！初号機の拳はコアにめり込んだ！自爆する間もなくサキエルのコアは壊れた！

「ええ……何これ」

第三使徒サキエル、哀れにも初号機のワンパンで沈んでしまった。

……あいつは遠中近、オールレンジに攻撃できるすげえ奴だったよ。ありがとうサキエル、さようならサキエル。

第壱話

エヴァンゲリオン初号機（搭乗パイロット綾波レイ）の単独行動による使徒殲滅はそれはもう髭グラサンとご老人達の計画を大いに狂わせた、らしい。

それがなんで分かるかと言うと、未だにNERV本部施設には入れず第三新東京市の地上施設に一時避難という形で対応されたからである。黒服のおっさんたちに囲まれて移動するとか、僕はいつからマフィアのボスになったのだろうか。……あつ、ボスの坊ちゃんでしたね。

「碓シンジくん、すまないが迎えが来るまではここで生活してもらうことになる」

相変わらず、NERVの黒服グラサンシリーズはロクにコミュニケーションを取れないようだ。まあコミユ力高い人をあのコミユ障がわりに置かないのは分かっているんだけど。暇だからミサトさんのちよいエロ写真を渡して職場で気まずい思いをさせてあげよう。

「はあ。……そういえば迎えに来るって言ってた人はどうなったんですか？ほら、この写真の人」

「なっ……その方は現在別件で来る事が出来ない」

おつ、すごいちゃんと持ち直して嘘吐いたよ。この非常時に初号機パイロットより優先すべき任務って何なんだろう。加持さんとの逢い引きとかかな？

あつ、黒服グラサンシリーズMark. 6が部屋から出て行ってしまった。

碓シンジが軟禁されていた同時刻、NERV本部施設内の赤木リツコ博士に貸し与えられた部屋で技術部と作戦部の部長同士が顔を突き合せていた。

「なんなのよ、あれ」

「何ってエヴァンゲリオン初号機、テストタイプよ。碓ユイさんが作り出した、ね」

「そういうこと言ってるんじゃないわよ！暴走状態になったと思ったら使徒殲滅して歩いて格納庫に戻って来たのよ!?なのになんでアンタはそんな平然としてるのよ！」

「私にだって分かるわけないでしょ！暴走状態になったエヴァがどういう行動を取るかなんて誰にも分からないの！それに、エントリープラグ内のレコーダーは全て機能してなかったしレイも気を失ったからあの様子じゃ覚えてないでしょうし」

「じゃあ、帰ってきた時に付けられていないはずの傷が付いたのは？」

「それも謎よ。ブラックボックス過ぎるのよ、エヴァの技術は」
「全ては闇の中ってわけね」

その頃、NERVドイツ支部にもエヴァ初号機による使徒殲滅の速報が入っていた。

「咳をしても一人、かあ」

「日本の古典か？アスカ。勉強熱心だな」

「別に、ただ早く会いたいだけよ。それが私の知らない奴でもね」

「知らないのにか？それは随分と……」

「変なのは承知の上よ。それでも会わなきゃいけないの。それに、何をやらかすか大体分かっているから拗らせる前に何とかできるかもしれないしね」

軟禁からおよそ3時間後、碇シンジはNERV本部施設へと連れて来られていた。

「はえ、くすつこいおつきい……ジオフロントってやつぱりデカいんですねえ！（クソデカリアクション）なんだあのピラミッド!?（驚愕）」

まあこんな感じでリアクション取つとけば中学生男子の反応としては上々でしょ（適当）。相変わらず無表情なおっさんたちに連れられてきたのはなんと総司令執務室であった。あの髭面ともう対面とか無理久保なんですけど……。サイドインパクトで吹き飛んでないから課金しなきゃ（使命感）

失礼しやーす。あつすつごいセフィロトの樹い……。こんな大きいセフィロトの樹描いてあるとか厨二病患者なのかな？厨二病患者がトップの組織とか逆張りで悪の組織になりそうな気がする、気がしない？（実体験）

「久しぶりだな、シンジ」

「本当に久しぶりだね」

「お前にはエヴァに乗ってもらおう」

「……………」

まず名乗れよグラサン（気さくな挨拶）コミュ障が過ぎるんじゃないですかね……。隣の副指令も苦笑いしてないで通訳してくれませんかね？

結局、冬月副指令との話し合いで僕の今後の待遇とNERVとの取り決めができた、のはいいんだけど、こういうのって普通は腕組してる髭のおじさまがやることじゃない？木っ端の職員ならいいけど僕、人類を守る大事なパイロットだよ？そしてサードインパクトが起こった時の僕の安月給加減に泣けそうだった。まあ、ミサトさんが8割持つて行ってお小遣い制だったせいもあるんだろうけど。

僕の質問責めのせいで疲れている副指令に母譲りの顔を使い、最後のおねだりをする。上目遣いでお願いをすると冬月コウゾウにクリティカルヒットするよ！

「最後に、僕が乗るっていうそのロボットを見せてくれませんか？」

「いいとも。好きにしまえ」

成功判定100%とかチヨロすぎるんだよなあ。

やってきました初号機格納庫。恐らく相変わらずのエヴァ初号機ちゃんです。僕の知る初号機ちゃんっぽい気がするんだけど、乗ってみないと分かんないんだよなあ。

「ここが初号機格納庫よ。そしてこれが汎用ヒト型決戦兵器人造人間エヴァンゲリオン、その初号機よ。有り体に言えば貴方の専用機ってことになるわね」

そう説明してくれるのは髭に良い様に使い潰される赤城リツコ博

士である。僕としてはいつでも義母さんって呼ぶんだけど髭がなあ……。ナオコさんはまだしもリツコさんの落とし方と使い方はちよつとどうかと思うよ。

「はえくすつぐいおっきい（本日二回目）すつげえ傷ついてる、はつきりわかんだね」

意識をリツコさんから初号機にずらすと細かい傷が付いていることが目に付く。僕の初号機傷つけた奴、ただじゃおかねえからなく

「明日からシンクロテストをやって貰わないとだから、アナタのIDカードとこちらで手配した物件のカギと携帯を渡しておくわね」

「アツハイ」

初号機を舐め回すように観察していると早く帰りたいたいのか僕と二人きり（意味深）の状況に嫌気がさしたりリツコさんから半ば強引に支給品を渡され、現地解散となってしまった。

携帯ももらったしアスカに電話でもかけてみつか！w